

日本緑化工学会 コミュニティレター

Community Letter of the Japanese Society of Revegetation Technology

第5号 2026年3月31日 発行



目次

「第57回 日本緑化工学会大会」案内 第1報……………3

「技術交流会」開催のお知らせ……………7

会員管理システム導入のご案内……………9

「日本緑化工学会賞」受賞候補者の推薦について……………11

研究ノート：地域性種苗に関連する課題を現場目線で紐解く 中島敦司……………15

：緑化の居酒屋談話（番外編） 面倒ですよね 学名の表記方法の巻 中村 剛……………17

緑地探訪：ベネッセアートサイト直島の「地」づくり 鎌田あきこ……………19

新会員の自慢：山から海までの出会い 鈴木ひかり……………20

1960年代の横浜昆虫事情—トンボ編— 福永健司……………22

自然美との出会い：御来光の滝 築瀬知史……………23

第19期第2回理事会議事録…27 会員の異動…31 賛助会員名簿…32



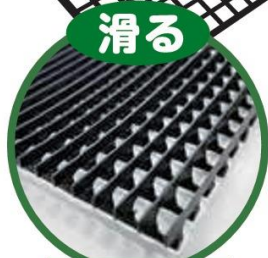
写真：和歌山地域植物研究会（わちけん）が造成したチカラシバの採取圃場（撮影：2024年11月）。年に1回の刈り取り管理だけで安定的な種子生産が可能となった。耕作放棄地での生産も期待できる。（中島敦司，研究ノート参照）



特殊樹脂ネットで 「滑らせて近寄らせない」 新発想の獣害対策



イノシカスライダーは、特殊成型した樹脂ネットです。
滑りやすい表面形状により、猪や鹿などの蹄を持つ偶蹄目(ぐうていもく)
動物の侵入を防ぎます。



拡大写真

イノシカ スライダー

鹿・猪対策用特殊樹脂ネット工



①イノシカスライダーに足を乗せる ②滑るので進めない ③おきらめて引き返す

前田工織株式会社



東京本社 / 〒105-0011 東京都港区芝公園2-4-1
東京営業部 芝パークビルA館12F
TEL.03-6402-3944
福井本社 / 〒919-0422 福井県坂井市春江町沖布目38-3
福井営業部 TEL.0776-51-9200



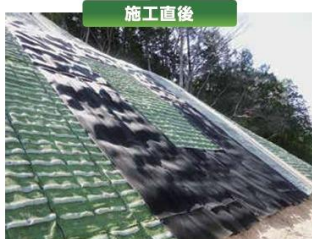
イノシカスライダーに足を乗せると、前足が滑ってしまうため踏み込みづらく、侵入が困難になります。

製品仕様

材質	ポリエチレン
厚み	10mm
幅	1.2m
長さ	5m
色	黒



実際の動画は
こちらから
※57秒～2分25秒



施工直後



施工後1年5か月

未施工箇所 施工箇所

施工箇所と未施工箇所では、植生状況に大きな差が確認されました。
使用推奨勾配: 30度以上



「第 57 回日本緑化工学会大会」案内（第 1 報）

第 57 回日本緑化工学会大会運営委員長 宗岡寿美

第 57 回日本緑化工学会大会を下記のとおり開催いたします。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

1. 大会概要

(1) 日程：2026 年（令和 8 年）9 月 1 日（火）～3 日（木）

1 日目 2026 年 9 月 1 日（火）

午前～午後 大会受付開始，開会挨拶，資材・工法展示
ポスター発表（論文部門，技術報告部門，交流部門）
総会，学会賞授賞式，シンポジウム，情報交換会

2 日目 2026 年 9 月 2 日（水）

午前～午後 評議員会，研究集会，資材・工法展示，業界研究会（仮）
口頭発表（論文部門，技術報告部門）
ポスター発表（論文部門，技術報告部門，交流部門）
優秀ポスター賞授賞式 ほか

3 日目 2026 年 9 月 3 日（木）

午前 現地見学会（帯広畜産大学内・施設見学）
昼食後に解散予定

(2) 会場

- 1 日目 帯広畜産大学（帯広市稲田町西 2 線 11 番地）
2 日目 帯広畜産大学（帯広市稲田町西 2 線 11 番地）
3 日目 帯広畜産大学（帯広市稲田町西 2 線 11 番地）および構内

2. 参加費・参加申込方法

後日，ご案内いたします。

3. 企業展示（資材・工法展示）

後日，ご案内いたします。

4. 業界研究会（仮）

今後，緑化分野を目指す学生各位を対象として小さな業界研究会（仮）を予定しています。
詳細については，後日，ご案内いたします。

5. 研究集会

緑化に関わる研究集会の開催を募集いたします。申込方法については、後日、ご案内いたします。

6. シンポジウム

「未定」

2026年9月1日（火）午後

（後日、掲載予定）

7. 現地見学会

「帯広畜産大学内の施設見学」

2026年9月3日（木）午前

(1) 概要

（後日掲載予定）

(2) 実施日時

2026年9月3日（木）午前 現地見学会 昼食後に解散

スケジュールの詳細は後日ご案内いたします。

(3) 募集人数

先着30名（予定）

(4) 申込方法

申込方法については、後日、ご案内いたします。

8. 研究発表の種別と申し込み

(1) 発表の取扱いについて

例年、日本緑化工学会研究発表会の発表は、学会誌大会特集号への投稿が必要な「論文部門」と「技術報告部門」での発表と、学会誌への投稿を必要としない（要旨の提出は必要）「交流部門」の3つに分けて行われます。

■論文部門と技術報告部門の発表・学会誌への投稿

論文部門と技術報告部門の発表・投稿申込については、大会特集号の募集案内をご覧ください。

■交流部門の発表募集

(1) 交流部門とは

より多くの会員に発表と意見交換の場を提供するために、学術的あるいは応用技術的な緑化に関わるさまざまな話題を募集します。発表はポスター形式のみとし、発表者にはポスターの他A4用紙1ページの要旨作成が求められます。これらのポスター・要旨の校閲審査はありません。

(2) 発表資格

日本緑化工学会正会員、学生会員および賛助会員組織に属する方に限ります。また、連名の場合には筆頭者が正会員、学生会員および賛助会員組織に所属する方であることが必要です。

(3) 申込方法

申込方法については、後日、ご案内いたします。

9. 優秀ポスター賞

(1) 優秀ポスター賞とは

日本緑化工学会では若手研究者および若手技術者を奨励するため、若手会員を筆頭者とするポスター発表を対象として、日本緑化工学会大会に相応しい優れたポスターを、論文部門、技術報告部門、交流部門のそれぞれから選出し、大会期間中に表彰いたします。応募者は、優秀ポスター賞表彰式までお残りください。

(2) 応募資格

優秀ポスター賞に応募するためには、筆頭発表者が学生会員であるか、大学卒業後あるいは大学院修士課程・博士課程修了後5年程度までの正会員であることが必要です。

(3) 応募方法

応募方法については、後日、ご案内いたします。

(4) その他

この大会では、新たな試みとして、上記(1)～(3)とは別に、技術者・研究者全般を対象とした「大会ポスター賞(仮)」を別途検討中です。申込等は不要です。

詳細については、後日、ご案内いたします。

10. 宿泊

JR 帯広駅周辺にホテルは多くありますが、行楽時期や他のイベント開催に重なりますのですぐに満室になる可能性があります。部屋を早めに確保することをお勧めします。

11. 大会運営委員会

委員長：宗岡寿美（帯広畜産大学）

副委員長：田崎冬記（(株)北開水工コンサルタント）

委員：木村賢人（帯広畜産大学）、中村 大（北見工業大学）、森本淳子（北海道大学）



土と水と緑の技術で 社会に貢献します

 国土防災技術株式会社

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 3-18-5

Tel : 03-3432-3656 Fax : 03-3459-7539

それは、人を守る緑。

自然の植生を再生し、地球環境を守る第一歩をお手伝いします

表層1m崩落抑制×全面緑化

ロンストロングネット

アンカー材やワイヤロープを組み合わせ、従来の緑化工法では実現できなかった「表層1mまでの崩落抑制」を可能にしました。

それは、人を守る緑。

 **ロンタイ** 株式会社

▼詳細はこちら▼



【本社】〒570-0011 大阪府守口市金田町3丁目1番11号
【TEL】06-6902-9401 【FAX】06-6905-9070
【支店・営業所】札幌・仙台・関東・静岡・中部・大阪・
四国・広島・福岡・鹿児島
【E-mail】info@rontai.co.jp 【HP】https://www.rontai.co.jp

「技術交流会」 開催のお知らせ

企画・事業部会では、若手技術者の技術・知識向上、交流を目的に、緑化技術に関する勉強会（交流会）を九州で開催していきます。第一回目は東日本高速道路株式会社 築瀬知史氏に話題提供をいただき、その後、参加者同士で議論、交流を深めていただけたらと思っております。どうぞ奮ってご参加いただきますよう、ご案内申し上げます。

- [1] 開催日時 2026年5月22日（金）18:30～20:30
- [2] 開催場所 九州産業大学または福岡市内会場（予定）※交流会後に懇親会を実施予定
- [3] 主催 日本緑化工学会 企画・事業部会
- [4] 開催方法 会場にて対面
- [5] 参加資格 若手技術者（20名程度。先着順）
 ※意欲的な学生の参加も歓迎。
 ※見学は、どなたでも可（申し込み必要）。
 ※なお、本勉強会は「森林分野 CPD」(JAFEE)として申請しています。「森林分野 CPD」の発行する CPD ポイントは、建設系 CPD 協議会に所属する 19 団体(建設コンサルタント協会など)の CPD ポイントと互換性を持つことから、それぞれの団体の CPD ポイントとして活用することができます。詳細は各 CPD 団体にご確認ください。
- [6] 参加費 無料。ただし懇親会は有料。
- [7] 話題 「道路法面管理の現況から逆説的に見えること」
 斜面防災上樹木の果たす役割は大きいですが、事業であっても、一般家庭であってもあまり重要性を顧みられることは少ない。高速道路における植生のり面の管理状況を簡単に説明し、それに至る理由について言及した後、自身の経験上から思い至った原因について、テーマを当日用意し、参加者の自由な意見を聞きたい。
- [8] 申込先・お問い合わせ先
 申込は以下アドレスより、交流会：5月18日（月）、懇親会：4月28日（火）までにお申し込みください。
 お申込みフォーム：<https://forms.gle/9TpZYBQby1zqpDUL7>
 お問い合わせ先：古野正章（九州産業大学）E-mail: furuno@ip.kyusan-u.ac.jp

会場等の詳細は、決まり次第、参加申込者へ連絡いたします。是非とも、ご参加ください。

日本緑化工学会 企画・事業部会

部会長：大藪崇司

担当理事：大貫真樹子，小野幸菜，黒沼尊紀，辻 盛生，宗岡寿美

担当委員：阿部建太，石垣幸整，高林 裕，古野正章

[事務局]

内田泰三（九州産業大学），金子武史（西日本高速道路株式会社），城本太郎（日本工営株式会社），末廣富士代（八千代エンジニアリング株式会社），古野正章（九州産業大学）

詳しくは日本植生HPへ



鹿食害対策一体型植生マット クサマモール

鹿の食害対策に！
植生マットと対策ネットを一体化した工法です。



食害対策ネットは、植物の成長と共に持ち上がることで、植物を食害から守ります。さらに、食害対策ネットで守られた植物は、のり面を保護し植生工としての機能が保持されます。

生育後イメージ

鹿食害対策ネット



対策ネットが植物を覆い、鹿の食害から守ります。



施工後3カ月

鹿の踏み荒らし対策には
「アニマルガード工法」をおすすめします。

太陽と緑の国づくり
Nichon 日本植生株式会社

本社：岡山県津山市高尾573-1
TEL 0868-28-0460 FAX 0868-28-4850

営業所：青森・盛岡・仙台・東京・神奈川・栃木・新潟・名古屋・長野・金沢・大阪・岡山・広島・島根・高松・松山

会員管理システム導入のご案内

2026.3月 会員管理システム検討 WG

このたび本会では、更なる会員サービスの向上のため、2026年4月より会員管理システム「SMOOSY（株）アトラス」を導入しました。これに伴い、新たに「マイページ」をご利用いただけるようになりました。以下に、マイページでできることや初回ログイン方法についてご案内いたします。すべての会員様にご対応いただく必要がございますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。なお、賛助会員様には、システムへの移行あたってご対応頂きたい内容について別途お知らせします。

●マイページでできること

- ◇ ご自身の登録情報の閲覧、変更
- ◇ 会費納付状況の確認
- ◇ 会費のオンライン決済手続き（クレジットカード決済等）
- ◇ 会費の請求書、領収書 PDF のダウンロード
- ◇ 学会からのお知らせ閲覧

1. マイページ ログイン方法

本会サイトからマイページのログイン画面にアクセスしてください。

マイページへのログインには「A-Pass」が必要です。

会員登録しているメールアドレスで A-Pass を作成し、ログインしてください。

登録しているメールアドレスが分からない場合は、事務局までお問合せください。

(1) アカウント確認/ログイン画面のメールアドレス欄に、会員登録しているメールアドレス※を入力し、[次へ]ボタンをクリックします。

※他学会の学術大会で「Confit アカウント」を作成した覚えのある方は、そのメールアドレスを入力してください。

(2) A-Pass で使用するパスワードを入力し、認証コードを送信します。

(3) 受信したメールに記載されているコードを入力して認証し、登録したパスワードを入力してログインします。

(4) パスワードを紛失した場合に備え、パスワード再設定用連絡先を登録してください。

(5) 画面の案内に沿い、A-Pass のログイン情報に会員情報のメールアドレスを紐づけます。

(6) 紐づけが完了すると、マイページの全ての機能がご利用いただけます。

2. 登録情報確認・更新方法

マイページにログイン後、トップページ下部の [会員情報を変更する] ボタンをクリックし、ご自身の情報を確認・更新してください。

詳しくは、マイページ画面右上の[ヘルプ]から「会員情報を変更するページ」をご参照ください。

3. 未払いがある場合のお支払い方法

未払いのお支払いがある場合、マイページログイン後、[請求/入金情報] 欄に表示されます。ご確認のうえお支払いをお願いします。

なお、新たな会員管理システム導入に伴い、オンライン決済を導入しました。

事務局の作業負担軽減のため、可能な限りオンライン決済（クレジットカード決済等）にてご対応いただけますよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

4. 請求書発行・領収書発行方法

請求書を発行する場合は、[請求/入金情報] 欄の画面右側 [操作] 枠の [請求書を発行する] からダウンロードしてください。

領収書を発行する場合は、お支払い後、[請求/入金情報] 欄の [入金済を含む全ての請求を表示する] をクリックし、[請求一覧] 画面右側 [操作] 枠の[領収書を発行する] からダウンロードしてください。

■問い合わせ先

日本緑化工学会 事務局

E-mail : office@jsrt.jp

担当理事 田崎冬記

E-mail : f-tazaki@suiko.jp

「日本緑化工学会賞」受賞候補者の推薦について

第19期 学会賞選考委員会

日本緑化工学会は、緑化工に関する学術および技術の進歩をはかるため、緑化工に関して特に優れた業績をあげた日本緑化工学会員に「日本緑化工学会賞」を授与します。つきましては、下記の受賞候補者推薦要領により受賞候補者を募りますので、会員各位には所定の「推薦書」に必要事項を記入の上、「業績資料」を添えて、令和8年5月15日(金)までに推薦(会員による他薦)していただくようお願いします。審査は「日本緑化工学会賞規定」により選出された「日本緑化工学会賞選考委員会」が行い、学会総会において受賞者を発表し、受賞者には表彰状ならびに賞牌を贈呈します。

推薦にあたっては、「受賞候補者推薦要綱」を読んで下さい。

関係する資料は、学会HPからダウンロードしてください。

URL : <https://www.jsrt.jp/prize.html#d>

1. 受賞候補者は個人あるいは企業等団体の代表者(技術奨励賞は発注者も含める)とします。
2. 被推薦者または団体が発表された業績資料のリストを添付してください。過去に学会賞の受賞歴のある候補者については、業績リストに受賞歴も含めてください。業績資料はPDF化し、本推薦書と共に以下の提出先まで電子メールで送付してください。電子メールの件名は「日本緑化工学会賞推薦書類」と記入してください。なお、書籍の場合は業績リストにISBNコードを記入して頂ければPDFの送付は必要ありません。
3. 提出期限：令和8年5月15日(金)(期限厳守) 電子メール提出後7日以内に受け取り確認の連絡がない場合には、提出先にお問い合わせください。

提出先：日本緑化工学会 学会賞選考委員会 福井 亘

E-mail : wfukui@kpu.ac.jp

日本緑化工学会賞 受賞者一覧

令和6年度（2025年9月授与）

研究奨励賞：梅原瑞幾「介護現場における緑化および緑との関わりによる勤務者のストレスケアに関する研究」

功績賞：山中典和「乾燥地緑化植物の生理生態研究の発展と普及に対する功績」

功績賞：柴田昌三「タケ・ササ類をはじめとする在来植物を利用した緑化技術の開発と普及に関する功績」

令和5年度（2024年9月授与）

研究奨励賞：松岡達也「屋上緑化におけるセダムの混植が蜜源植物の生育に及ぼす効果に関する一連の研究」

技術奨励賞：佐藤厚子「メッシュシートを用いたオオイタドリの生育抑制手法の開発に関する一連の研究」

功績賞：小林達明「緑化分野における再生生態学の研究と普及に関する功績」

令和4年度（2023年9月授与）

技術賞：中村華子「地域性種苗を利用した植生再生技術の社会実装を目指した一連の研究」

令和3年度（2022年9月授与）

研究奨励賞：武井理臣「日本産ガマズミ属種子の形態生理的休眠の打破および早期発芽に関する研究」

研究奨励賞：西野文貴「シダ植物の増殖方法としての孢子発芽と前葉体成長に関する研究」

功績賞：森本幸裕「生物多様性に配慮した都市の緑化に関する研究および実践に関する功績」

令和2年度（2021年9月授与）

研究奨励賞：人見拓哉「都市化に伴う緑地土壌での有機物分解特性の変化」

令和元年度（2020年9月授与）

研究奨励賞：宮崎直美「北海道十勝地方の都市人工林における在来草本・木本の再生・更新過程に関する一連の研究」

技術奨励賞：伊東日向「海岸林の構成樹種における発芽から稚樹段階の耐塩性評価」

技術奨励賞：小野幸菜「自然回復緑化および在来植物種子の最適な取り扱いに関する技術開発」

技術奨励賞：寺本行芳「荒廃地等における表層土の安定性予測技術と植生による減災効果の検証」

功績賞：増田拓朗「四国香川における都市緑化，里山～里海の保全活動の展開」

平成30年度（2019年9月授与）

論文賞：宗岡寿美「積雪寒冷地の法面保全と緑化工技術の応用に関する一連の研究」

研究奨励賞：黒沼尊紀「屋上緑化における環境改善能の定量化と環境影響評価」

研究奨励賞：中島有美子「立地条件に応じた広葉樹海岸林の樹林目標に関する研究」

技術奨励賞：戎谷 遵「瀬戸内海沿岸における海浜植生の保全エリアの抽出技術」

平成29年度（2018年授与）

技術賞：東日本高速道路株式会社 木更津工事事務所

「首都圏中央連絡自動車道（圏央道）における野生動物の道路横断構造物の設置」

研究奨励賞：七海絵里香「緑化植物との関わりの中の研究」

研究奨励賞：矢動丸琴子「オフィス緑化が勤務者の心理に与える影響に関する研究」

研究奨励賞：小宅由似「法面における植生ならびに土壌に関する一連の研究」

技術奨励賞：小川泰浩・東京都三宅支庁産業課「火山性荒廃地の環境保全に配慮した治山緑化工法の開発」

平成28年度（2017年授与）

論文賞：鈴木弘孝「壁面緑化による温熱環境改善効果に関する一連の研究」

論文賞：中村 剛「表土利用工および自然侵入促進工によって緑化された裸地斜面の植生回復に関する研究」

技術賞：入山義久「緑化植物の種子生産及び性状・性質に関する研究と開発」

技術賞：田中 淳「法面におけるクズの管理方法に関する一連の技術開発」

技術賞：福田尚人「地域自生種を用いた寒冷地法面の緑化工技術の開発と普及」

功績賞：丸山純孝

平成 27 年度 (2016 年授与)

論文賞：加藤真司「都市緑化の評価に基づいた緑化便益の増進手法に関する研究」

論文賞：田崎冬記「寒冷地における貴重動植物を含む河川環境保全に関する一連の研究」

研究奨励賞：大塚芳嵩「都市緑地における利用行動と地域住民の健康との関連性に関する研究」

研究奨励賞：濱田 梓「京都市近郊部における農地形態・土地利用と鳥類生息との関わりについての研究」

功績賞：江崎次夫

功績賞：吉川 賢

平成 26 年度 (2015 年授与)

論文賞：岩永史子「樹木の環境ストレス耐性に関する研究」

論文賞：執印康裕「森林の崩壊防止機能の定量的評価に関する研究」

論文賞：山瀬敬太郎「山地荒廃斜面の緑化と斜面安定に関する研究」

研究奨励賞：飯田義彦「奈良県吉野山のヤマザクラ集団に関する生物季節学的研究」

平成 25 年度 (2014 年授与)

論文賞：今西純一「リモートセンシングによる樹木の活力度評価に関する研究」

論文賞：那須 守「都市緑地の保有する健康関連 QOL に関する研究」

研究奨励賞：寺南智弘「乾燥地に生育する数種樹木の樹形、成長に及ぼす砂の移動の影響に関する研究」

功績賞：輿水 肇

功績賞：近藤三雄

平成 24 年度 (2013 年授与)

論文賞：上町あずさ「テイカカズラ類の分類体系の整理と交雑の可能性に関する研究」

技術賞：下園寿秋「林道切土法面における鹿児島県下の地域性を考慮した緑化技術の開発」

技術奨励賞：田中賢治「緑化基盤の化学性調整による植生制御に関する一連の技術」

功績賞：千葉喬三

功績賞：太田猛彦

功績賞：長谷川秀三

平成 23 年度 (2012 年授与)

技術賞：東京電力株式会社 代表：齋藤与司二「自主生産による地域性種苗を用いた自然回復緑化の取り組み」

研究奨励賞：淑 敏「緑陰形成による駐車場の熱環境改善効果の定量的評価に関する研究」

平成 22 年度 (2011 年授与)

技術賞：日置佳之・サントリープロダクツ株式会社 天然水奥大山ブナの森工場・西武造園株式会社
「サントリー天然水奥大山ブナの森工場における生物多様性緑化」

技術賞：東興ジオテック株式会社 日本樹木種子研究所「在来木本植物種子の早期発芽能力検定方法」

技術賞：日本植生株式会社「表土シードバンクを利用した吹き付け工法（マザーソイル工法）の開発とその検証」

功績賞：亀山 章

平成 21 年度 (2010 年授与)

論文賞：岡 浩平「海浜植生の成帯構造の保全・復元に関する研究」

奨励賞：呉 初平「マツ枯れ荒廃林におけるマツ林再生の試みに関する研究」

平成 20 年度 (2009 年授与)

技術賞：亀山 章「東京農工大学フィールドミュージアム唐沢山における在来種をもちいた法面緑化試験」

平成 19 年度 (2008 年授与)

論文賞：近藤哲也「野生植物の種子発芽特性の解明と植生回復への利用に関する研究」

論文賞：大澤啓志「絶滅危惧植物ミズキンバイが生育する環境の復元・創出に関する研究」

論文賞：細木大輔「森林の土壌シードバンクを利用した緑化技術に関する研究」

平成 18 年度 (2007 年授与)

論文賞：内田泰三「自生種を利用した緑化ならびに植生回復に関する研究」

論文賞：高 政鉉「土壌シードバンクを用いた自然回復緑化手法の有効性に関する研究」

論文賞：根本 淳「都市近郊コナラ二次林の林床植生管理に関する研究」

技術賞：小澤徹三「道路緑化分野における樹液温度を用いた樹木活力度評価に関する技術開発」

平成 17 年度 (2006 年授与)

論文賞：小林達明「内湾渚再生に関する地域生態学的研究」

論文賞：笹木義雄「瀬戸内海の半自然海岸および人工海岸に成立した海浜植生の自然性を評価する手法の開発」

論文賞：山中典和「中国乾燥地における植生回復に関する樹木生理生態学的研究」

技術賞：小林達明・倉本 宣「生物多様性緑化ハンドブック」の編集

平成 16 年度 (2005 年授与)

論文賞：藤原宣夫「植栽樹木の二酸化炭素固定量から見た都市緑化施策の評価」

平成 15 年度 (2004 年授与)

論文賞：三木直子「アカマツの生理生態的特性とまつ材線虫病発現の関係」

論文賞：森本淳子「野生ツツジ群落の保全と復元に関する研究」

平成 14 年度

論文賞：星子 隆「高速道路のり面の植生遷移に関する一連の研究」

技術賞：日本道路公団関西支社 大津工事事務所「「森のお引越し」事業」

奨励賞：内田泰三「ヨシ属、特にヨシおよびツルヨシを用いた水域緑化と河畔緩衝帯の造成に関する研究」

平成 13 年度

論文賞：高橋輝昌「緑地土壌の化学的・生物学的養分特性及び改善に関する研究」

功績賞：安保 昭

平成 12 年度

論文賞：吉田 寛「厚層基材吹付播種工による樹林化とその評価に関する一連の研究」

平成 11 年度

功績賞：山寺善成

功績賞：吉田博宣

平成 10 年度

論文賞：嶋 一徹「発達過程にある森林での窒素集積と生物窒素固定に関する研究」

技術賞：日本道路公団試験研究所「道路のり面における自生種を用いたユニット苗工法による植生復元技術の開発」

平成 9 年度

技術賞：日本道路公団中国支社「中国横断自動車道総社地区自然環境対策（ひいご池湿原の保存）」

功績賞：小橋澄治

功績賞：堀江保夫

平成 8 年度

該当者なし

平成 7 年度

技術賞：長谷川秀三「土壌調査器具の開発と応用に関する研究」

功績賞：塚本良則

功績賞：村井 宏

平成 6 年度

功績賞：太田重良

功績賞：北村文雄

平成 5 年度 (第一回)

功績賞：倉田益二郎

功績賞：新田伸三

研究ノート Research Note

地域性種苗に関連する課題を現場目線で紐解く

中島敦司

和歌山大学システム工学部／生態・環境緑化研究部会 (nakashima.atsushi@g.wakayama-u.jp)

生態・環境緑化研究部会の最近のメインテーマは、言うまでもなく「地域性種苗」です。研究集会も重ねてきましたし、議論も尽きません。地域性種苗という言葉は、理想論として語られることが増えてきましたが、現場に立つと、価格、流通、施工時期、発芽のばらつきといった、極めて現実的な問題の集合体でもあることが分かります。これに対して、研究者、技術者が集まって「何らかの指針を示せないか？」と部会では様々なことを積み重ねているのです。

ただ、正直なところ、部会活動という視点で網羅的な活動報告を書くのはなかなか難しい。ということで、本稿では、筆者研究室の試行錯誤を軸に、地域性種苗まわりで最近何をしてきたのかをご紹介します。なお、筆者研究室の取り組みは、特別な技術開発というものではなく、地元企業と協働した「和歌山地域植物研究会（わちけん）」の実験現場で直感した「ちょっとした違和感」を一つずつ試し、成功と失敗と副産物を積み重ねているものです。

最初は少量播種実験の追跡です。種子が高価でも、播種量が少なくて済めば工法を安く維持できるからです。その結果、播種量を一般値の1/40にまで減らした発生期待本数50本/m²のような少量播種でも2年目には植被率が追いつくことを確認し、10年以上経っても草地在維持され、種子の価格に振り回されない工法選択の可能性を示すことができました²⁾。

続いて発芽勢を整える前処理をあれこれ試しました。温度処理や薬剤処理は思ったほど安定した効果を実現しませんでした。ところが副産物として、70%アルコール選で充実種子を選別できることや、種皮への傷入れ、さらに4日～1週間の浸水処理でも傷入れ効果を代替できることが分かり、結果的に試験施工では発芽勢を安定させることに成功しました¹⁾。狙った成果より副産物が増える、いつもの和歌山大パターンです。一方では「ススキやチカラシバの種子は休眠するか？」という課題に対しては、「休眠しないか、休眠を特徴づける現象は確認できなかった」という結果も得ましたし³⁾、台風増加を想定した塩害からの回復過程も把握できました。

次の興味は流通問題に突入し、採取機の開発に手を出しました⁵⁾。失敗も多く、完成はまだ先ですが、精選に使えるような原理が見えてきたため、気づけば精選機の開発にも足を突っ込んでしまいました。これまでの研究集会で紹介してきたように軽量ハンディ仕様にこだわっている理由は、自生地での採取を前提にしているからです。そしてさらに話は横に広がり、耕作放棄地を利用した種子栽培の実験へと突入。チカラシバを対象に、粗放管理でも採種圃が回るが見えてきました⁴⁾。



写真1 砕石で締め固められた駐車場で育成したチカラシバの根圏（播種半年後）

欲が出ると人間ろくなことをしません。栽培する場合に「どこまで粗放管理できるのか？」をいろいろ試した結果、極端な例としては砕石で締め固めた土の駐車場に直径10cm、深さ10cmの穴を開けて播種するだけでも採種圃が成立する可能性が出てきました。試算では、収益性は駐車場並み。実験着手は2024年の異常高温、乾燥というハードな年でしたが、真夏の短期間だけ散水し、あとは放置。それでも枯れることなく結実しました。成長終了後に掘り上げてみると、根は培土の範囲を飛び出し硬い地面へ侵入（写真1）、土中の砕石の下側に張り付くように細根を伸ばしていました。ストーンマルチの保湿効果の話は地表だけじゃなかったようです。

さらに勢い余って経済試算にも手を出しました。専門外なので、という注釈付きですが、現在の最低生産者価格が維持される前提なら、種子栽培は水田より収益性が高く、一般蔬菜栽培に匹敵する可能性が見えました。しかも超粗放管理で回せる農法です。社会シナリオ分析でも、粗放管理が主因となって10年スパンでプラス転換という結果になりました。地域性種苗の種子栽培が耕作放棄地の再生を誘発するというのです。今後、専門家と組んで再計算したいところです。

保存条件の話もあります。温度や湿度を組み合わせであれこれ試した結果、例えばチガヤ種子では、25℃乾燥保存において発芽率、発芽勢ともに良好。一方で5℃保存は発芽率を著しく下げてしまい、その後、いろんな温度に入れ直しても回復しませんでした。種子保存は低温で、という筆者の固定理解は覆されました。



写真2 和歌山地域植物研究会が試作した後撒き機

先にも示しましたが、2024年の猛暑はススキの造成草地にダメージを与えました。気候変動が進めば、猛暑が当たり前になり、対策が必要になります。そのひとつは吹付け厚を増やすこと。そして「吹付け厚を増したら深い位置の種子はどうか？」という興味が湧き、種子の設置深度を最大10cmまで変えた実験を実施。結果は、深度10cmでも発芽自体は可能だが、出芽率は著しく低下、発芽率も下がることを確認しました。出芽率の低下は、発芽はできたものの出芽するまでに土中で力尽きたという現象でした。また、発芽率が低下する原因を探ると、水分や土圧の影響は棄却され、土中の酸素濃度が鍵であることが分かりました。文献を探してみると、表層数cmレベルの酸素の挙動って報告がほぼない。酸素濃度を実測して記録できたことは思わぬ副産物でした。こちらは2026年JSRT大会で報告する予定です。

関連して、事前に基盤を吹き付けておいて、適期に播種する後撒き工法も試しました⁵⁾。狙い通りに発芽は良好だったものの、道路を交通規制しなくても実現できる方法がないと現実にならない。このため、後撒き機(写真2)の開発にも参入。結果は、コスト的に微妙という残念な結果に留まっています。まだ諦めてはいません。それは、この装置が完成すれば、適期播種だけでなく、吹付け厚を厚くしても種子を深い位置に置かない播種が実現できるからです。

他にも、土壌硬度が高い場合の発芽後の根の挙動、牧草とススキやチカラシバを混播した場合の競合関係、ススキの野焼き後の地際部ダメージなど、興味に任せて実験を実施。統計的には未達なものばかりですが、興味深い現象だけは記録できています。このように多動な興味で、空振り含めて色々やっています。いずれ再整理し、JSRTに報告する予定です。

地域性種苗は、緑化学、生態学、農村社会学が交差する、やればやるほど課題も疑問も興味も増える分野です。一方で研究者の高齢化という問題は深刻で、特にフィールド研究者は激減。若い研究者、技術者の参入を心から期待しています。地域性種苗の研究、開発現場は人手不足です。「地域性種苗」という言葉が、現場を知らないまま理念だけが先行することのないよう「現場で手を動かす研究」はまだ必要だと感じています。多動な老研究者が暴走する前に、ぜひ。

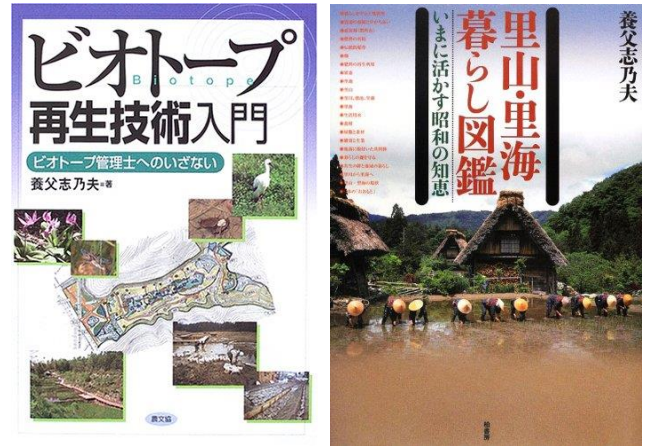


写真3 養父志乃夫先生が残された著書^{7,8)}。他にも多くのビオトープや里山関連の著書を残された

最後になりますが、生態・環境緑化研究部会の前身のひとつ、生態系保全研究部会の設立メンバーで、和歌山大学をご定年された養父志乃夫先生が、2026年1月8日に逝去されました。享年68歳。養父先生は、日本における湿地ビオトープ造成運動の先駆者であり^{6,7)}、また、早くから里山保全の重要性を広く啓発されてこられました。後年は里山に関連する民俗学の研究^{8,9)}にも参入され、多くの著書を残されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

引用文献

- 1) 濱田碧・岸本大地・中島敦司(2023) 温度条件および傷付け処理がチカラシバ(*Pennisetum alopecuroides* (L.) Spreng.) の発芽に及ぼす影響. 日本緑化工学会誌, 49(1), 39-44
- 2) 亀井碧・友田誠也・上野山公基・川中一博・井上裕介・吉原敬嗣・湯崎真梨子・中島敦司・山田守(2017) 地域性種苗の播種量の違いが緑化草地における植被に及ぼす影響. 日本緑化工学会誌, 43(1), 195-198
- 3) 亀井碧・中島敦司・川中一博・山田守(2022) ススキ *Miscanthus sinensis* Andersson の種子重量および採取時期が発芽に及ぼす影響. 日本緑化工学会誌 42(2), 292-297
- 4) 亀井碧(2022) 地域性種苗を用いた「みどりの地産地消」緑化における和歌山型ビジネスモデル実現に向けた取り組み. 日本緑化工学会誌, 47(3), 365-366
- 5) 中島敦司・亀井碧(2022) 地域性種苗の抱えた課題 地域協働や文理融合の重要性. 日本緑化工学会誌, 47(3), 367-372
- 6) 養父志乃夫(2003) ホームビオトープ入門: 生きものをわが家に招く. 農山漁村文化協会. 197pp
- 7) 養父志乃夫(2006) ビオトープ再生技術入門: ビオトープ管理士へのいざない. 農山漁村文化協会. 199pp
- 8) 養父志乃夫(2012) 里山・里海暮らしの図鑑: いまに活かす昭和の知恵. 柏書房. 374pp
- 9) 養父志乃夫(2014) アジアの里山食生活図鑑. 柏書房. 307pp

研究ノート Research Note

緑化の居酒屋談話（番外編） 面倒ですよね学名の表記方法の巻

中村 剛

日本植生株式会社 (info@nihon-shokusei.co.jp)

居酒屋グリーンで田中淳氏と本号の記事について打ち合せしていたところです。忘れないうちに着手せねばと、足早に帰宅したのですが、突然気が変わって、今回は学名の表記方法について解説することにしました。この原稿を目にした田中氏は、今頃びっくりして椅子から転げ落ちていることでしょう。申しわけない。

さて、日本緑化工学会は植物を取り扱う学会ですから、論文や技術報告には、ほとんど何かしらの植物（近年は動物も多い）が登場します。そして当学会の執筆要領（2022年11月1日改訂版）では、その植物、動物の種名には、学名を付記することを求めています。以下に執筆要領から抜粋します。

「植物、動物等の生物の和名はカタカナ書きとする。初出箇所には学名を命名者まで必ず記載し、学名はイタリックとする。（後略）」

学名に馴染みある研究分野の方にとっては、常識的と思われる事柄なのでしょうが、そうではない分野の執筆者にとっては、この3行に示されざる数々のルールで悩まされることとなるのです。本稿では、普段学名を使う機会が少ない一技術者として、執筆者目線でその表記方法のおさらいをしたいと思います。園芸品種と雑種、また植物以外の分類群については割愛します。もしかすると、編集委員会とは異なる見解があるかも知れませんが、課題提起としてご容赦ください。誤認やご異議があればご指摘ください。本稿が2ページに収まることを願って、まずは最近受けた質問から。

Q.1 技術報告にも学名は必要なのでしょうか。

A.1 現行の執筆要領では、論文・技術報告の適用区分が示されていないため、技術報告にも学名が必要と解釈できます。この前に使われていた大会特集号【論文・技術報告】原稿執筆要領（2022年度版）では、次のように記されていました。

「[技術報告]学名をすべて記載するとページが超過する恐れがあるときには、編集委員会の判断により学名を省略してもよい。ただし慣用名（和名等）により表される種を明確にするために、参照した図鑑を引用すること。引用する図鑑は信頼性の高い冊子体のものとする。」とあります。ともかく技術報告の本文で数多くの学名が書き切れない場合は、編集委員に相談してみてください。

Q.2 「初出箇所」で表題から、本文から？

A.2 執筆要領には「表題は、原則として40字を越えないものとする。表題の学名表記が、この原則をうけて困難な場合は表題ではなく本文の初出時に学名をイタリック表記するこ

と。」とあります。過去に日本緑化工学会誌に発表された論文と技術報告には、当然のことながら、植物名を含む表題が多数みられます。この中には学名を併記したものもありますが、そうでないものの方が多くみられます。そして学名を併記した表題の大半が40文字を越えています。中には40文字に収めるための苦渋の判断でしょうか、学名の命名者（詳しくは後述します）を省いたものもみられます。ダブルスタンダード化していることから、表題の学名はなくしても良いのではないかと、個人的には考えますが、皆さまいかがでしょうか。

Q.3 イタリックてなんですか（20代 会社員）。

A.3 では、これから本題に入ります。

Level.1 学名の構成と和名

世に認められたすべての植物には、その種を論文で発表した命名者によって学名が与えられます。学名は「属名」+「種小名」+「命名者」から構成されます（例.1）。

例.1 トチノキ *Aesculus turbinata* Blume
種名 属名 種小名 命名者

昔学校で習ったリンネの二命名法です。学術研究以外の場では、学名とは別に慣用的な名称として種名（和名あるいは標準和名）が用いられます。種名は、同一種に対して複数の呼称が存在したり、異なる種に同一の名称が用いられりする場合があります。混乱を招く恐れがあります。そのため、論文や技術報告では研究対象とする植物を厳密に特定することを目的として、種名に必ず学名を付記することとしています。

Level.2 斜体・正体と命名者

「イタリックてなんですか」そうでした。傾いた書体（斜体）のことです。例.1をご覧ください。属名と種小名はイタリックです、命名者は傾いていません。これはローマン（正体）と呼ばれる書体です。

分類学的な見直しにより学名は、時代とともに変化します。学名に付記する命名者には、その種を最初に論文発表した命名者を括弧で囲んで表記します（例.2）。

例.2 オオイタドリ

Fallopia sachalinensis (F.Schmidt) Ronse Decr.
属名 種小名 最初の命名者 命名者

属名と種小名だけをイタリックで表記します。オオイタドリは Schmidt さんが最初に発表したようです。その後タデ科の研究者である Ronse Decraene 氏が分類を再考した結果、現在の学名となりました。古い図鑑ではかつての学名が見られることでしょう。

ここでは学名に付された Decraene 氏の名前が Decr.と略記されています。国際的な命名者データベース³⁾により、この略記は一応定められていますが、使用する図鑑によって用いられる略記が異なる場合があります。例えば現在シーボルトは, Siebold に表記が統一されていますが、過去の図鑑では Sieb.と略記されるものもあります。同一の論文や技術報告の中で、学名中の命名者に不整合が生じないように、引用する図鑑や資料を統一することが肝要です。

Level.3 本文中の括弧：全角・半角

執筆要領では、本文中の括弧は全角を用いることとしていますが、命名者を囲む括弧は、学名中なので半角の括弧を使います。普通、本文中では種名の後に括弧書きで学名を示しますが、この場合学名を囲む括弧は全角、学名中の括弧は半角となります(例.3)。ご注意ください。

例.3 マテバシイ (*Lithocarpus edulis* (Makino) Nakai)

Level.4 下位の分類：亜種・変種・品種

ひとつの種の中には、いくつかの亜種(羅: *subspecies*)、変種(羅: *varietas*)や品種(羅: *forma*)が見いだされることがあります。ちなみに「羅」はラテン語です。この場合は、「命名者」の後に「亜種名・変種名・品種名」を続けて表記します。亜種・変種・品種は、それぞれ *subsp.*, *var.*, *f.* と略記するのが一般的です。付与された、亜種名・変種名・品種名はイタリックで表記します。一方, *subsp.*, *var.*, *f.* はローマン(正体)です(例.4)。面倒ですね。

例.4 クズ

Pueraria lobata (Willd.) Ohwi *subsp. lobata*

属名 種小名 命名者 亜種 亜種名

なお、本稿で取り上げない、栽培品種名(羅: *cultivar*)や、通称として用いられる品種(例えば‘タマリユウ’)は、ここでいう品種(*forma*)とは別ものです。

Q.4 引用する図鑑は何がお勧めですか。

A.4 人それぞれですが、多くの種がでてくる論文・技術報告では、ハンドブックでなく、概ね全ての種類が網羅されている大きな図鑑が良いですね。昔は複数の図鑑が刊行されていましたが、現在では平凡社の『改訂新版 日本の野生植物』²⁾ ほぼ一択です。講談社の『Flora of Japan』もありますが、ここまで読み進めてくださった方の中で、この書籍を手元にお持ちの方は、おそらくおられはしまい。

先述の執筆要領(2022年度版)では冊子体による引用を求めています。現在ではウェブ公開されている植物名データベースを用いることが増えています。日本国内にみられる植

物ですと、YList³⁾が植物の研究者や関連技術者の間でスタンダードとなりつつあり、種名・学名をこのデータベースによったとする論文や調査報告書をよく目にします。同じくウェブ公開されている『環境省植物目録』については命名者の記載がないため、ここでは言及しません。いよいよ紙面が残り少なくなってきました。

Level.5 同定できない種の表記をどうしよう。

私はこれまで緑化法面に生える植物の調査をしてきましたが、現場でも持ち帰って調べても、なお名前のわからない種類に出会うことが多々あります。この場合、おのれの同定スキルを超えて、無理に学名を与えることだけは避けたいものです。そうすると「イネ科の一種」とか「スゲ属の一種」とかが頻出するわけですが、これらには科名、属名を記載し、その後に種(羅: *species*)の略記である *sp.* をローマン(正体)で付記します。この場合命名者は不要です(例.5)。

例.5 イネ科の一種 *Poaceae sp.* (科名はローマン)
スゲ属の一種 *Carex sp.* (属名はイタリック)

例えば「ヤナギ属 *sp.*」のように、種名に *sp.* を付した記載が公式な調査報告書などでも普通に見られます。現場で記帳する際にはこうした記入をしますが、おそらくラテン語に由来する *sp.* は学名に付するものでしょうから、正しくは「ヤナギ属の一種」とすべきでしょう。

なんだかよくわからない複数の種が含まれる場合は、分類群の学名に *spp.* を付記します。研究対象が複数の種を取り扱う場合にも、この表記が用いられます。しかし種名欄に「キク科の複数種」などという記載は見たことがないため、日本語ではどのように表現するのが良いのでしょうか。ぜひどなたかご教示ください。

最後に、分類群すら不明な種(不明種)の学名欄に *Unknown sp.*となぜか英語で記載されているのを良く目にします。これが正式な表記なのかどうかはよくわかりません。

この後に続く Level 6, 7, 8…は、半ば私の苦労話や失敗談のようになってしまいますので、続きは居酒屋グリーンで直接お話しできればと思います。

科学の進歩は喜ばしいことですが、近年は分類体系の見直しが加速度的に進んでいます。カエデ科が消滅し、ユリ科は解散状態となるなど、種名や学名の変化もめまぐるしいものです。植生調査に携わる技術者として、時代の変化に取り残されぬよう研鑽を続けねば……などと考えを巡らせているうちに夜が明けてきました。本稿はここまでといたします。

参考資料

- 1) International Plant Names Index. <http://www.ipni.org/> (参照: 2026年2月25日)。
- 2) 大橋広好ほか 編 (2015-2017) 改訂新版 日本の野生植物, 平凡社
- 3) 米倉浩司・梶田忠. “BG Plants 和名-学名インデックス (YList)” <http://ylist.info> (参照: 2026年2月25日)。

緑地探訪 ベネッセアートサイト直島の「地」づくり (香川県香川郡直島町)

鎌田あきこ

株式会社ユニットタネ (info@unittane.com)

直島は瀬戸内海に浮かぶ島で、島の南エリアにはベネッセアートサイト直島が運営する複数のホテルや美術館がある。建物内にアートが展示されるのみならず、突堤や砂浜、断崖などの屋外に常設されているのが特徴で、さらには、場所に合わせて作品が制作される「サイトスペシフィック・ワーク」の先駆となった地でもある。つまり、アートと周囲の景観とは切っても切り離せない関係でそれぞれが存在している。

2017年より始動した「直島ランドスケーププロジェクト」の監修者として私たちは直島に関わり始めた。アート=図は、自然=地(じ)との「対比という調和」により浮かび上がると捉え、植生や植栽等に対してなるべく人為を感じさせない「地」の管理をおこなうことを提案し、伴走してきた。法面緑化の工法や材料選択もその延長線上にあるといえる。

プロジェクトでは風化花崗岩がマサ土化し崩れるメカニズムや四国のまあるい山について学習し、崩落を自然の節理として受け入れざるをえない視点を得た。ごく小規模な崩落は数年前前から起こっていたらしく、当時斜面の所々に植生シートが張られていたが、シートの裏はマサ土がずり落ち定着しない。応急処置にも指針が必要だと思っていた矢先、2017-18年の大雨で、数回にわたり崩落が起きた。

修復工事には「長繊維補強土工法+鉄筋挿入工」が採用されたが、エリアの景観資源の価値に重きを置いた重要な決断だったといえる。さて緑化については、緊急性から外来牧草と在来種の混播で環境省の許可が下りていたが、アートの背景となる「地」の創出のため、ささやかでも直島由来の種子を混入したいと考えた。作業に当たっては、種子の採取や保管に関する既往の文献を参考に試行錯誤した。文献にない植物も多く、これらは試験的に蒔いてみたりもした。こうして多くのスタッフと一緒に島の果実を採りに山へ入り、実から種子を精選し、事務所の倉庫で保管し、吹付材に混入してもらった一連の取り組みが出来たことは成果だといえる。実際には、

購入した国産・在来種子もろとも発芽しないという過酷な猛暑の春にあたってしまい、一面のバミューダグラスフィールドとなった。異常気象には抗えないが、関係者間で原因を考察し次のステップにつなげようとした項目もある。トレーでの発芽試験もその一つで、2023年の追加崩落修復に並行して実施し、導入した全7種が発芽した。現場法面でも一定の成果を得られ、今後の遷移についても見守っていききたい。

2025年もまた別の場所で小規模崩落があったが、今度は別レイヤーの価値創造課題と併せて取り組みを上げようか、と模索中である。こうして、場所ならではの法面緑化方法確立への追及は、まだまだ続いていくように思う。

ベネッセアートサイト直島ではほかにも、かつての早期緑化造林によるモリシマアカシアの強風による倒木、マツ枯れ、ニセアカシアの砂浜進出など、植生に関連した課題も多い。2017年当初より進めてきた「地域性種苗生産」も今年で10年目を迎え、アカシア伐採後の裸地化した地面に直島由来の苗を植える取り組みも行っている。

「図」と「地」は反転するという^{2,3)}。アートを通じて直島の風景が再認識される、その時、それに応えられるだけの「その土地らしさ」を持ち続けていられればと願っている。

引用文献

- 1) 直島ランドスケーププロジェクト. <https://benesse-artsite.jp/lspj.html>. (参照 2026年2月24日)
- 2) 鎌田あきこ (2022) 風景の地(じ)をつくり作品を支える「直島ランドスケーププロジェクト」の取り組み, *Benesse Artsite Naoshima Periodical Magazine APRIL 2022*, ベネッセアートサイト直島: 10-15.
- 3) 西田正憲 (2014) 深遠な風景へ、そして、豊かな心へ, *Naoshima Note* 8月号(NO.14), ベネッセアートサイト直島: 8-11.



写真：左 2020年8月(崩落修復後2年目)、右 2025年8月(法面の中央付近は2023年追加崩落修復箇所)



山から海までの出会い

鈴木ひかり hkr-suzuki@ctie.co.jp

株式会社建設技術研究所

1. はじめに

今回『新 会員の自慢』を担当させていただくことになりました、株式会社建設技術研究所 環境部の鈴木と申します。

前号で執筆された山田夏希様、そして編集委員長の岡浩平先生よりご依頼を賜りました。大変貴重な機会をいただき、御礼申し上げます。まだ入社1年目で右も左もわからない状況ではございますが、今回は自己紹介と業務について執筆させていただきます。

2. 私の経歴について

環境を専門としている方には馴染みのある話かもしれませんが、私も幼い頃から森に出かける機会が多く、イベントや体験教室が大好きな常連の子どもでした。高校生の頃には「フィールド活動が楽しそう」という安直な理由から地学部へ入部し、自然環境を題材に研究したいという思いが芽生えました。文化部でありながら、春は山へ水晶採集、夏は県外で鉱物採集、秋は毎週川を歩いて露頭を掘り、冬はその考察と発表に取り組むという活動で、当時は勉強との両立に悩む運動部のような泣き言を言っていました。しかし進路を考える際に、やはりフィールド活動は楽しいことに気づき、そこで得た材料を広い視野で考察し、成果としてまとめる自然環境分野の研究の流れに興味を湧きました。

地学部で登った山の一つに百名山の「鳥海山」があります。鳥海山からは、海、田畑、街、山がとても近い立地に並ぶ、自然と人の営みが溶け込んだような美しい景色を望むことができます。その後、縁あって山形大学農学部に入部し、鶴岡キャンパスで温かい人々にお世話になりながら充実した日々を過ごしました。在学中も鳥海山には何度も登りましたが、初めて目にした時の景色と感動は、今も鮮明に覚えています。

大学・大学院では人と森の相互関係を考える森林影響学研究室に所属しました。研究テーマを決める際、当初は憧れの高山域で研究したい気持ちに縛られ、なかなか方向性を決定できずにいました。そのような中で改めて視野を広げて調べているうち、台風被害により藪化が進み、衰退の危機にある「鳥海ムラスギ」という保護林の存在を知りました。本来守られるべき保護林の現状に問題意識を抱き、「天然スギ後継樹の生育動態」というテーマで研究を行うこととしました。

大学院では訳あって学部時代の研究テーマは継続できませんでしたが、森林管理への問題意識から、深刻な状況にある庄内海岸林を対象に研究しました。全国的に海岸林の造成・



管理は、戦後安定期にあると捉えられることが多いものの、近年は管理不足やマツ材線虫病等により、甚大な被害が生じている地域もあります。指導教員の菊池俊一先生には、外部活動や行政との関わり等も含め、庄内海岸林が抱える深刻な状況をご教示いただき、「庄内砂丘海岸林の地形と林分構造が飛砂・飛塩防備機能に与える影響」というテーマで研究を行うこととしました。

本研究は大きく3つの柱から構成され、①海岸の前線である砂丘の地形勾配が海浜植生や飛砂動態に与える影響調査、②海岸林の立木密度が飛砂・飛塩捕捉効果に与える影響調査、③上記調査結果を踏まえた風洞実験での較正と、砂丘地形と立木密度の因子が海岸汀線から海岸林後端まで連続するベルトの飛砂動態に及ぼす影響について考察しました。結果、砂丘地形と立木密度の適正な管理によって飛砂・飛塩捕捉効果が期待できることが示唆されました。幅広い視点で自然環境を捉えたいと考えていましたが、振り返ると想定よりも多角的な研究になったと感じております。



写真-1 鳥海山からの眺望 写真-2 庄内海岸の現状

学部生の頃は、自然の美しさや楽しさを人に伝える仕事に就きたいと考えていました。しかし森林管理についての研究を重ねる中で、自然環境が抱える多くの課題に向き合い、その解決策や意義を社会へ伝えることこそ重要ではないかと考えるようになりました。就職活動では非常に悩みましたが、最終的に自然と人の調和について取り組める建設コンサルタントへ就職しました。

3. 株式会社建設技術研究所について

私が勤務する(株)建設技術研究所は建設コンサルタント業界に属し、インフラに係る計画、調査、維持管理等を担う

会社です。その中で私は環境部に所属し、河川、湖、道路、森林、海岸等を対象に、生物調査、市民との合意形成、グリーンインフラの計画など幅広い業務に携わっています。業務では都市域を対象とした案件が多く、私は都市域の自然環境の知見に乏しいため、日々研鑽を重ねております。

前述のように経験が浅いため、今年度活動した弊社の取り組み「ドボクルーズ 江戸東京・川のなぜなぜ舟めぐり」について紹介させていただきます。これは一般参加者を対象に、若手技術者が江戸から続く伝統や文化、歴史、自然等をクルーズで紹介する活動です。複数あるコースのうち、私は芝浦コースを担当し、主に東京湾のまちづくりや埋立ての歴史、干潟や海の生きものについて案内しました。技術者としての経験は未熟ですが、この活動を通して専門的な内容の伝え方や柔軟な対応、わかりやすい資料構成など、技術者にとって基本的ながら重要な点を身をもって学びました。皆様も機会があればぜひご参加いただくと幸いです。



写真-3 舟めぐりの様子（芝浦コース）

4. 日本緑化工学会との関わり

本学会は、学生から社会人まで幅広い分野の方々と出会える、人とのつながりが深い学会だと感じています。初めて大会に参加した際は学生で知り合いもおらず不安でしたが、多くの方に声をかけていただき、とても嬉しかったことを覚えています。大会の研究集会では、若手技術者や学生がグループワークで議論できる機会も設けてくださり、多くの学びと刺激をいただいております。

また、本学会には「海岸林・沿岸域緑化研究部会」があり、専門的なお話や助言をいただける方がいらっしゃることも非常にありがたく存じます。その他にも幅広い部会と専門家の方々があり、「緑化」という一つの大きな課題に対して幅広い視点から議論できる点に大きな魅力を感じております。

5. 好きな自然について

私は地域の自然と人のつながりを感じるのが好きで、プライベートでも山から海まで様々な場所を訪れています。最近訪れてよかった場所を二つ紹介いたします。

一つ目は尾瀬です。人生で一回は尾瀬の山小屋で働いてみたい思いがあり、学生時代に「山の鼻小屋」で働かせていただきました。それ以来、尾瀬の虜となり、群馬・福島・新潟それぞれの登山口を巡り、麓の各村の個性や暮らし方に大きな

魅力を感じています。尾瀬は自然保護発祥の地であり、古くより開発の歴史の中で試行錯誤しつつ、人を惹きつけ、自然保護の在り方を次世代に継承する仕組みが自然と根付いているように感じ、訪れる度に感銘を受けています。

二つ目は「みちのく潮風トレイル」（蕪島～種差海岸、浄土ヶ浜）です。高山植物が咲き誇る海岸など、多彩に移り変わる景色を楽しみました。今年は福井（氣比の松原）、湘南、宮城の海岸林も歩きましたが、地域ごとに立地要因や求められる海岸林の機能も違うため、学びながら見学しています。

祖父が三陸の漁師だったこともあり、東日本大震災の爪痕を目にし、自然の残酷さも噛み締めました。地域ごとに復興の在り方も異なり、未だに建設中の防波堤や更地、規模が半減した市場等を見つつ、今後どのような街を目指すべきか極めて難しい課題が残っていると感じております。

地方では、高齢化等により自然や人々の文化が失われつつある課題があると思います。業務ではもちろん、プライベートでも何らかの形で貢献できるようになりたいと思っております。



写真-4 尾瀬の水芭蕉刈り

写真-5 青森県 中須賀海岸

6. おわりに

拙い内容となり恐縮ですが、本コラムを通じて皆様と少しでもつながる機会ができれば幸いです。

未熟ではございますが、日頃より本会員の皆様から多くのことを学ばせていただいている立場でございます。学生時代の研究も未だ投稿できておらず、知識を提供できるように精進いたします。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくごお願い申し上げます。

参考資料

- 1) 鳥海ムラスギ林木遺伝資源保存林、東北森林管理局ホームページ。
<https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/apply/publicsale/yuri/100405-3.html>
- 2) 出羽庄内公益の森づくり事業、山形県ホームページ。
<https://www.pref.yamagata.jp/337050/syounaimoridukuri/index.html>
- 3) ドボクルーズ® 江戸東京・川のなぜなぜ舟めぐり、建設技術研究所ホームページ。
https://www.ctie.co.jp/news/sustainability/2025/20250804_1542.html

1960年代の横浜昆虫事情 トンボ編一

福永健司

東京農業大学地域環境科学部 (fuku@nodai.ac.jp)

私の家は横浜市西区の南の端、南区と中区と接した場所で、港から見ると野毛山の裏手にあり、そこで育ちました。昔は家のすぐ近くの通りに市電が走っていましたが、こんな横浜の街中にも昆虫がたくさんいました。市街地には空き地、いわゆる原っぱがあったし、周辺には雑木林、ため池がたくさんあったからかでしょうか。

私が小学生の1960年代頃は、夏休みといえまず虫捕りでした。家のすぐ近くには大きな原っぱがあり、端には泥沼化した浅い大きな池がありました。このあたりは関東ロームの台地に刻まれたいわゆる谷戸の頭部で、湧き水が豊富にあったからだと思います。私の家も含めて明治時代から戦後まで大きな印刷会社経営者の別荘があったそうで、その名残の池だったようです。私の家にも自然にはないはずの花崗岩の大きな庭石がいくつもあり、家の裏や隣家には今でも地下水が湧いています。夏休みになると、私は近くのその池でトンボ、ドジョウ、ザリガニ捕りに熱中しました。

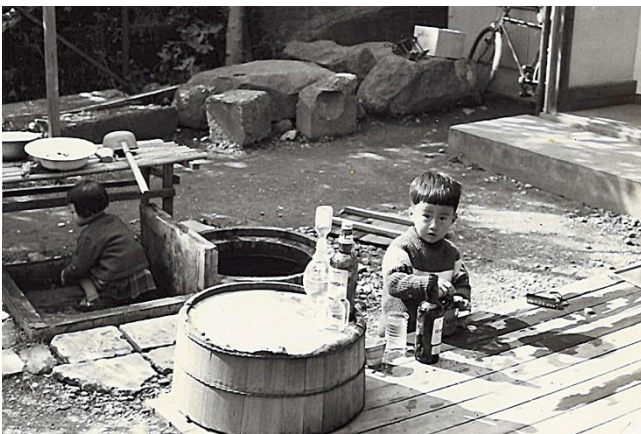
トンボといえばその頃の主役はギンヤンマでした。今、横浜中心部からいなくなってしまった昆虫の代表格はギンヤンマではないでしょうか。ほかには、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、アキアカネなど赤トンボ類、さらには糸トンボ類、ごくまれに主に流れのある水辺に棲むオニヤンマが来ました。オニヤンマを除くトンボは数も多く雑魚であって、美しく勇壮で毎日来るとは限らないギンヤンマにはかないません。胸部全体が鮮やかな黄緑色で、腹の基部背中側には個体によって白いもの、青いもの、ピンクのものなどがいて、それも捕まえる楽しみの一つでした。

ギンヤンマだけでなくトンボの多くはため池や水田、公園の池などの淡水池、流れの緩い小河川や用水路などがないと命を繋いでいけません。その頃、横浜には家の近くでいうと南区（現在の南区と港南区）あたりにため池や小川がたくさんあって、そこから飛んできたのだと思います。1970年代に入ると宅地化や駐車場化の波が押し寄せて、近所の池も埋め立てられコンクリート舗装の駐車場と化してしまいました。

ギンヤンマが家の近くの池に来るのは早朝と夕方に集中していました。私をはじめ近所の子供たちはそれを朝ギン・タギン、交尾してオス・メス一緒になっているのをゲツター（本来は野球のダブルプレーのことですが）と呼んでいました。捕えるのに使ったものは近所の駄菓子屋で売っていたザリガニやドジョウ捕りに使う赤い糸の目の粗い網で、チョウなどに使う捕虫網ではありません。網で飛んでいるのを捕まえたり、生きたシオカラトンボをまず捕まえて、それに糸を付けて飛ばせ、襲いかかってくるのを捕まえることもしましたが、水深が非常に浅いのでビーチサンダルを履いて池に入り、ギンヤンマが水中から突き出した石や棒などにとまったところで網を思い切りかぶせて捕まえることが多かったですね。ゲツターだったら同時に2匹捕まえられる。今思えば、子孫を残そうと産卵に来ているのに可哀想なことをしたものだ...

今でも、ギンヤンマが悠々と空中を滑るように飛んできた姿、それを見つけたときに「来たッ！」と叫ぶ友達の前、自分が捕まえたときの友達に対する優越感、捕まえたギンヤンマの至近距離で見た顔の表情や体の色艶などがありありと思い出されます。それと、池の底の生暖かいヌルヌルした泥の感触も。そんなとき、池の中で転んでガラスの破片で左の掌を切ってしまい、近所の町医者に3針縫ってもらいましたが、その傷跡は70歳間近の今でも残っています... しかし、トンボはほとんど見ることはできなくなりました。

お断り：何せ50年以上前の記憶だけが頼りで書いています。当時の厳密な検証は特にしていませんので、思い違いなどがあるかも知れません。お気づきの方はご指摘いただけると幸いです。



写真（左）：トンボが来る池に流れ込む湧水は複数あり、わが家の裏にもあって生活に使っていた。

それを溜める水槽と背後は文中にある花崗岩の大きな庭石（従兄弟と後ろ姿の妹）。

写真（右）：水槽には冷たい水が常時流れ込み、夏には野菜やスイカを冷やした（右が著者、左が妹）。

自然美との出会い Encounter with Natural beauty

御来光の滝 (64) 石鎚山の南麓にかかる仁淀川の源流、百選三難攻のひとつ

令和2年4月2日
愛媛県久万高原町若山

築瀬 知史

東日本高速道路株式会社／日本緑化工学会 会長 (xsmay8@gmail.com)

3年余りで93滝訪問できたのもツキという他ない

日本の滝百選は、日本全国に散りばめられていることは前回記したが、1日1滝ではとても達成できるものではない。日本全国となると交通費も馬鹿にはならない。ただ、ついていたのは、子供たちの手が完全に離れる日が間近だったこと、消化できずに捨てていた有給休暇の完全取得ができたこと、出張の前後、特に令和元年9月の九州大会は大きな後押しとなった。

夏休みを絡め、熊本空港に前乗りし、鹿児島、宮崎、大分と周り熊本に戻り、計13滝を2日半で周り、夕刻にある理事会に間に合うよう福岡へと戻った大強行を思い出す。九州地方17滝では、西表島は二月前に訪問済、屋久島と大会翌日のレンタカー予約忘れて断念した佐賀県唐津市にある2滝、計3滝を残すのみとなった。

出張や行事に合わせて行った滝の方が多くことは言うまでもない。令和元年(平成31年含み)に訪れた53滝のうち、37滝が何かのついでに絡めて行っていることになる。

令和2年は、どちらがついでかわからない感じの屋久島から始まる。土曜日マイカー規制が始まる前日となる2月29日、羽田朝一乗継便を使い超特急で縄文杉に。翌3月1日午前中大川の滝、福岡直行便を使い夕方に唐津2滝。

翌月の石鎚スカイライン閉鎖解除を待つて四国の百選コンプリートへと続く。

丁度疫病が蔓延し始めた頃である。不運ではあるが、半年以上前からの飛行機予約が多く、キャンセル料(途中から無料に変わるが)を考えると簡単にはやめられず、「滝行=3密にはならない健全性」という錦の御旗に加え、公共交通機関はガラガラ、新幹線半額、旅行補助など激安交通費と宿泊費とくれば、妨げるものは何もない。残り40滝では、1日1滝という所も多く、止めればタイムリミットが刻々と迫る一方となる。

今回は、初めての1日1滝であり、滝紀行を残そうと思うに至った愛媛県「御来光の滝」を紹介したいと思う。

新潟勤務時代は、職務上火曜日以外は比較的時間の調整が取りやすく、新年度早々の木金休み。水曜日の勤務終了後新潟空港へと自転車転がす。新潟市内は坂が少なく、自家用車を単身赴任先に置いたことがない私にとってはありがたかった。最終便で伊丹へ。疫病下で乗客は数える程。前後左右誰も座っていない。

梅田で賑わいの全くない店で旧知と酒を酌み交わす。松山行の夜行バスの乗客は僅か2人。運転手がやってくるまでどこに座ってもよいという。

7時40分にレンタカー屋に着くと、20分早い手続きさ



写真1 御来光の滝 普段は細い御来光が太く暴れ、岩壁は黒光る

せてもらえた。15分早くスタート。思っていたような朝の渋滞もなく、石鎚スカイラインの通行止は前日に解除され、快適に長尾尾根駐車場に着くことができた(9:20)。

疫病の影響かも知れないが、駐車場に他車は停まっていない。私の滝行姿は赤基調で目立ちすぎて、公共交通を利用するのは憚られ、着替えはいつも現地で行う。途中、スカイラインで引き離れた2トトラックが着き、ヒッピー風のおじさんが腹を突き出しながら3分程ウロウロした後、立ち去った。かつこ悪い。…ああは、なりたくない。

北西方向に御来光が小さく見えている。

事前に見ていたネット上の風景は写真そのまま、前日の雨の影響でガスすることも心配したが、確り晴れていて一安心。足首のサポーターなど、三難攻に臨む以上、装備は万全を期した。沢(面河(おもごう)川)へのアクセスが高低差300mの急坂で、ここだけはトレッキングシューズとも考えたが、未だ足に馴染まず、始めから水陸両用靴で行く。ああでもないこうでもない、思いの外、準備に時間がかかる。

遠くの石鎚山と御来光を写真に納め、駐車場出発(9:42)。情報通り、駐車場から車道を100mほど上に向かった所にカーブミラーがあり、ガードレールの奥に明らかな踏分跡を難なく確認できた(写真2)。

いくつかのネット情報で、帰り道で迷わないように…とあり、今回は珍しくリボンを用意した。衝撃桃色全盛だが、あまり山で見ない橙色を選び、役立つ否かは不明だが連番を振った。道は非常に分かり易かったが、今までの経験上、戻るときに、何度か道に迷うことがあり、急坂の10か所に残した。

踏分に入りすぐに急斜面があり、確りとしたロープが張ってあった。ありがたく使用させてもらう。

前日の雨で、道は滑りやすく、何度か危うく転倒しそうになった。

踊り場でうろつき10本のリボンを付けた割には思っていたよりも早く、沢の左岸側に降りることができた(10:07)。ある主さんの情報で上流側にある笹の堰堤が下流側に見える。主さん…わかりにくいというよりも、ルートの間違ったのでは？



写真2 面河川への降り口



写真3 普通は伏流している箇所だが、この日は普通の沢



写真4 面河川でこの辺りだけ岩質が違う平滑な河床

面河川は、ここから少しの間、伏流していた(枯沢)と多数の情報にあったが、雪解けと前日の雨の影響か、この日は普通の沢で、渡渉無しに対岸の遊歩道には行けない(写真3)。

少し先の左岸側に細長い滑滝があり、右岸側にブルーシートのかたまりと先人が残したリボンが見える。迷わず渡渉する(10:11)。遊歩道にするか沢登りにするか迷っていたが、渡渉時の水の冷たさに怖気づき、不帰同様即座に遊歩道を選んだ。

遊歩道は大きく蛇行する面河川をショートカットする程度かと高を括っていたが、結構なアップダウンがあって最初から辟易した。

次の渡渉は、いわゆる千畳敷的な岩が河床に敷き詰められた感じで、平滑な岩盤上の流れを渡る。ここは、御来光の他所とは岩質が異なる(10:27 写真4)。

その次の渡渉点では膝まで濡れた(10:32 写真5)。

面白味も減って冗長さが出てきたころ、右岸側に、七釜(10:35 写真6)、犬房滝(対岸の支沢 10:40)、魚止の滝(10:41 写真7)と見えた。無理すれば降りられそうにも思えたが、ここまででほぼ1時間。ルートの不安もあり、体力を温存して、先を急いだ。



写真5 渡渉点にはリボンが沢山ついている



写真6 仁淀ブルー感がしっかり出ている七釜



写真7 魚止の滝



写真8 仁淀ブルーに立ち止まる



写真9 ×字滝付近で遊歩道を見失う



写真10 難攻の右岸(左側)側の岩

渡渉を何度も繰り返すが、相変わらず沢は勢いが強い。普段は、飛び石を伝って楽に渡れる箇所だと思うのだが(10:58)。ルートも沢沿いが増えて、仁淀ブルーに思わずシャッターを切る(写真8)。数回渡渉を繰り返し、支沢の×字滝(自称)に到達(11:06写真9)。沢沿いに進んでいた遊歩道が途切れる。

南側斜面は崩落か?と思えるほど土が見え、ルートを間違えるかも?という不安もあって、ここからは、沢登りで行く。実際の遊歩道はこの崩落然としたとんでもない急斜面に続いているが、下からはルートが不明瞭で往路では発見できず。

当然のこと、ここからは沢も急傾斜となり、落流(落差5m以上だと「滝」)も多い。下からは、進みやすい所が見えるが上からは直近まで行かないと見えないこともあり、振り返っては、目印リボンを確認し、見えなくなる前の適当な所に順次10本程つけた(結局は無意味だった...)

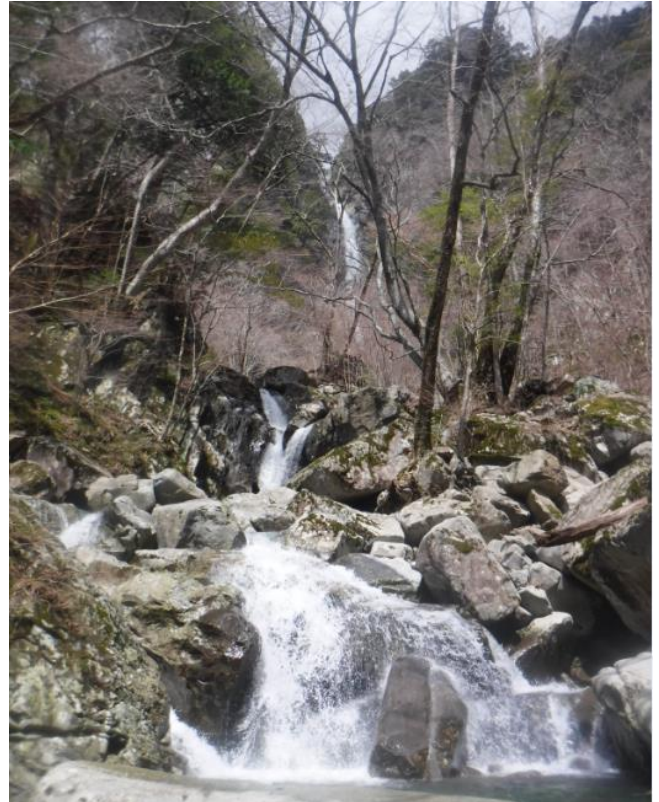


写真11 木々の切れ間に御来光の姿が...



写真12 落ちそうに張り出した右壁上部の岩

仁淀(「面河」は、仁淀川上流の愛媛県側の名称)ブルーを楽しみながら10分程行くと、右岸側が狭くなり斜度40度以上の滑り易そうな一枚岩が出現(11:16写真10)、渡渉して滑って落ちると腰まではつかりそうなところ。水面に着かないように岩をへつってなんとかクリアした。

しばらく進むと右岸側の支沢に滑滝があり(11:20)、本流は右へと方向を変える。さらに高度を上げていくと、水音が大きくなってきた。前衛の滝と思われる小滝の向こうに、御来光が姿を現した(11:25写真11)。

ここから、接近すること5分程度で遊歩道と合流できたので、20分程楽しんだ沢登りを終了し(11:29)、そこから遊歩道を進んだ。5分程進むと、遊歩道は姿を消し、再度、沢部の岩登りで壺を目指した。

自身知る限り情報よりも遥かに多い水量と震える程冷たい

飛沫に感動する (11:43 写真 1)。

今までの沢の水量が多かったことも頷ける。

無駄なシャッターを何度も押してしまう。

南向きの御来光は、陽光を浴びて黒光りし、右側の上部の岩は、今にも落ちんばかりに張り出す (写真 12)。壺は落下場所から少し離れているので、少しだけ穏やか。虹が掛かる。

飛沫だらけの自撮り (11:50 写真 13) と誦経を済ませ、大岩に腰を下ろし小休止。天候も良く、最高の惚けタイム。

名残惜しくもあり、少し離れてから、再度、御来光を拝む (12:03 写真 14)。

帰路では、はっきりと見えたので遊歩道を降りた。

綺麗な水色に足を止め、写す (写真 15)。

ちょうど1時間後、最初の渡渉点に到着 (13:03)。

翌日以降時間があったので、面河川を沢沿いに遡り、小さな滝まで寄り道をした (写真 16)。

駐車場までの登り返しは辛かった。九十九折りの返し点で何回立ち止まったか。

翌日からしばらく滝行初の筋肉痛に泣かされた。

後日落差 102m の3段瀑と知る。上部は見ることができない滝だということか...

もう一度行きたい。誰か案内できるだろうか？

<了>

滝に興味を持たれた方は、こちらをどうぞ！

<https://www.instagram.com/xsmay8/>

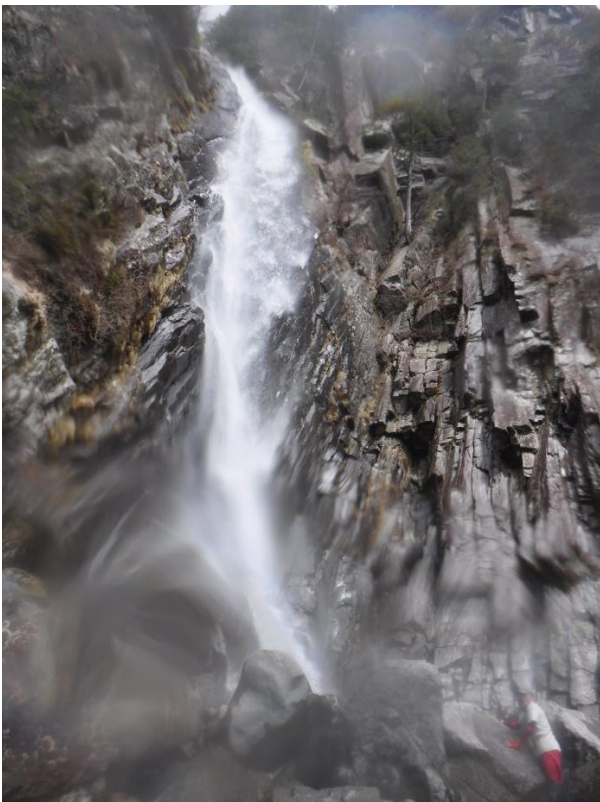


写真 13 自撮り



写真 15 清流日本一の源流は、やはり美しい



写真 16 寄り道の沢歩きで行った落流

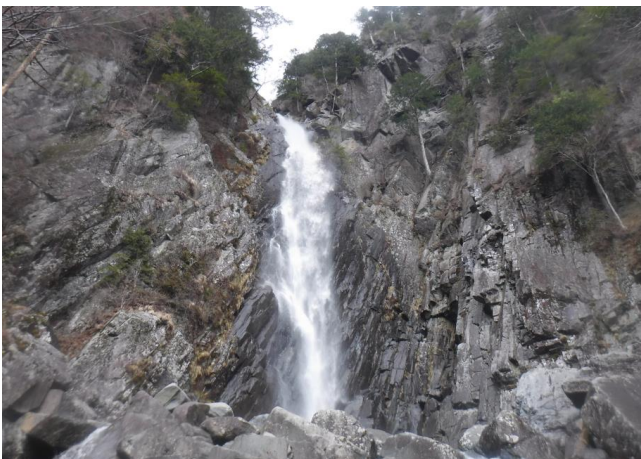


写真 14 名残惜しく振り返った御来光

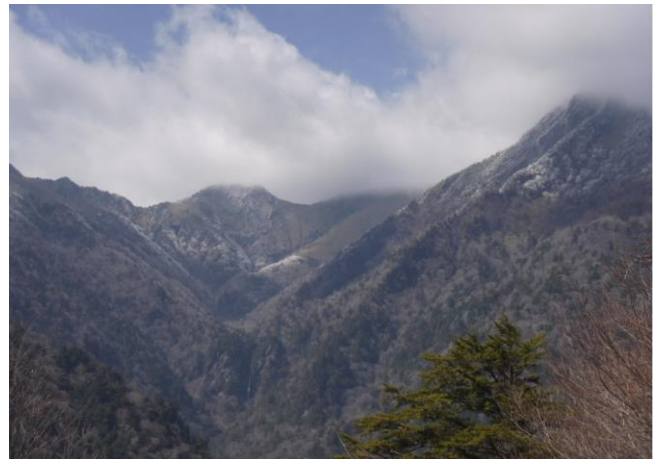


写真 17 石鎚山 (左中奥) と小さく見える御来光

日本緑化工学会 第19期第2回理事会 議事録

日時：令和7年11月8日（土）13:00～16:30

場所：国土防災技術株式会社 5階会議室（東京都港区虎ノ門3丁目18-5）及びオンライン（Zoom）

出席者：築瀬知史，内田泰三，福井 亘，大貫真樹子，大藪崇司，岡 浩平，岡田準人，小川泰浩，小野幸菜，田崎冬記，橘 隆一，田中 淳，辻 盛生，貫名 涼，早坂大亮，宗岡寿美，森川政人，森本淳子（以上理事），入山義久（以上監事）

委任状提出：今井祥之，上野裕介，江川知花，黒沼尊紀，小島孝文

第19期第1回臨時理事会が令和7年11月8日（土）に開催され，以下の議題について審議された。

議事審議前に，今期はじめての顔合わせであることから，築瀬会長，出席各理事から挨拶があった。会長からは，会員の学会運営への参画を盛り上げるため，任期2年間で各理事が担当する学会関連業務の負担軽減をはかり効率よい業務方法の検討に努めるとの表明とともに，理事方へ学会発展のため引き続きの協力を依頼された。

1. 役員組織

総務部会 内田部会長および各部会長，委員長より第19期役員組織が提示され，原案どおり承認された。未定の組織は，決定次第，理事会のメール審議に諮ることとした。役員組織は，次号のコミュニティレター（以下，CLとする）および，学会ホームページ（以下，HPとする）に掲載する。

2. 評議員選出

総務部会 大貫理事より，各理事の推薦による第19期評議員40名が提示され，原案通り承認された。評議員全員に就任の内諾を得ており，今後，事務局から委嘱状を送付と，学会HP・CLに氏名を掲載する。

評議員会では，出席者から毎回熱心な意見をいただけてありがたく，今後も評議員には大会および評議員会に積極的に参加いただきたいとの声が上がった。

3. 会員管理システム導入

3-1 会員管理システムの導入検討について

会員管理システムワーキンググループ（以下，会員管理システムWGとする）田崎理事より，会員管理システム導入の提案があった。はじめに，築瀬会長から現況の会員管理についての問題点が提示され，特に，これまで会員名簿管理用に学会HPとは別のサーバーを使用し費用がかかっていることや，HPの入力フォームが会員情報とリンクされておらず，会員名簿への追加修正や，請求書・領収書発行および入金データなどを事務局で手入力しており，効率改善を要することなどの課題が挙げられた。

これらの課題を解決できるシステムをWGで複数検討した結果，ランニングコストがよいこと，多岐の会員情報管理（入会申請，年会費請求・入金管理（請求書・領収書のオンライン発行），イベント参加登録，履歴管理等）が可能であることに加え，HPのサイト構築やメーリングリスト（以下，MLとする）の作成も可能である，(株)アトラスの「SMOOSY」が提案され，承認された。SMOOSYは，同じくアトラス社が運営する，当学会でも活用のオンライン投稿審査システム「Editorial Manager（エディトリアルマネージャー）」との連携も可能であり，投稿に必要な事項（会員照会・会費納入状況の調査，掲載料請求）が効率よく得られ，使い勝手がよいことも評価された。

なお、今後の SMOOSY 導入により学会事務局の業務が大幅に削減されることになるため、業務委託先である勝美印刷(株)と契約内容・契約料の変更について協議の必要があることも話し合われた。また、SMOOSY 導入と管理業務のシステム移行は、今後 1 年程度を要する見込みであることも伝えられた。

3-2 学会 HP の改修作業と広告形態について

1) 学会 HP 改修について

HP・広報部会準備委員会 田中理事より、会員管理システム (SMOOSY) の導入に関連し、今後の SMOOSY での学会 HP へのサイト構築に前もって HP 構成内容の整理・ページ改修を実施中であることが報告された。特に、今後 12 月には次回大会の発表申し込みの告知をおこなうので、これに間に合うサイト作成作業をおこなっていくことを説明された。なお、サイト構築の際に画像・容量に制限があるようであり、作業を進めながら適する内容を検討していくと話された。

2) 広告形態・種別の見直し検討

田中理事より、HP 改修に関連し、賛助会員に依頼する広告形態・種別も見直し、今後導入の SMOOSY への広告掲載も可能とのことから、広告収入の維持のための対策を検討中であることが報告された。

4. 業務委託契約

総務部会 小野理事より、学会事務局業務委託の内容追記および再契約を行うことについて説明があった。

学会事務局 (勝美印刷(株)) との契約書の追記については、HP 管理等の項目を追加することが承認されているが (第 18 期第 10 回理事会)、これに加え、今後導入予定の会員管理システムの運用によって事務局の業務量減少の可能性があり実施済みの業務量に応じて精算させてほしい旨の文言を追加することが説明された。今後、会長が学会事務局に出向き、上記を追記した契約書を締結予定であることが伝えられ、承認された。

5. 京都大会 (第 56 回日本緑化工学会大会) の報告

第 56 回日本緑化工学会大会 (大会運営委員長 今西純一氏 (京都大学)) について、大会運営委員会 貫名理事から、当大会が 2025 年 (令和 7 年) 9 月 8 日 (月) ~10 日 (水) に京都大学芝蘭会館および、大阪・関西万博会場において開催され、予定された研究発表、研究集会、情報交換会、学会賞授賞式、公開シンポジウム「緑化の未来を拓く! 森林・草地生態系における植物群集形成の科学」、大阪・関西万博会場における現地見学会等の全プログラムが無事に終了したことが報告された。

参加登録者数は正会員・賛助会員 143 名 (うち現地見学会参加者 31 名)、学生会員 27 名 (うち現地見学会参加者 6 名)、非会員 (一般) 43 名 (うち現地見学会参加者 5 名)、非会員 (学生) 9 名 (うち現地見学会参加者 1 名) であった。これに加え、京都大学ならびに京都府立大学の学生のべ 25 名が運営スタッフとして参加した。

研究発表数は口頭発表 17 件 (うち論文 7 件、技術報告 10 件)、ポスター発表 62 件 (うち論文 13 件、技術報告 11 件、研究交流発表 38 件)、研究集会 5 件であった。資材工法展示には 4 社 (会員 2 社、非会員 2 社) からの出展があった。情報交換会には 137 名の参加があった。

なお、本大会は京都市および(公財)京都文化交流コンベンションビューローの助成金を活用したことも報告され、問題なく経費運営ができた。

6. 次年度大会（第57回日本緑化工学会大会）の進捗状況

第57回日本緑化工学会大会の準備進捗について、大会運営委員長 宗岡理事より以下が報告された。

- ・会場 帯広畜産大学（北海道帯広市）
- ・開催日程 令和8年（2026年）9月1日（火）～3日（木）
 - 9月1, 2日：研究発表等行事，9月3日：現地見学会
 - ※会場費の関係で平日開催とする。
 なお、大会直前に開催の理事会は、8月31日（月）夕方前頃からJR帯広駅近辺で開催予定。
- ・大会運営委員会
 - 大会運営委員長 宗岡理事 副委員長 田崎理事
 - 委員は積雪寒冷地緑化研究部会の幹事を中心として組織し、森本理事と、木村賢人氏（帯広畜産大）、中村 大氏（北見工業大）に就任していただく。
- ・懇親会
 - 大会初日の9月1日 16時頃～18時を予定。参加費5,000円程度で検討中。
- ・現地見学会
 - 9月3日開催，大学構内の見学を予定。広大な大学敷地に建設されている緑化研究圃場，気象観測施設，水田造成地等の学内施設および，大学内の酒蔵や新設の乳製品製造工場等を見学コースに含める計画。大学生協で昼食会をした後に解散予定。昼食代等を含めた会費を検討中。
- ・その他
 - 大会研究発表論文が収められる大会特集号（日本緑化工学会誌 第52巻1号，全文PDF版）の発行（J-stage公開）が例年8月31日で大会目前のため，参加者が会場で学会誌を閲覧できるよう，Wi-Fi環境の整備を確認，検討する。

7. 各部会の連絡・報告

7-1 学会誌の編集（編集部会）

編集部会 岡理事より，学会誌およびCLの編集状況が報告された。

- 1) 第51巻2号（編集中）：論文5編，短報1編，技術報告2編
- 2) 第51巻3号（2026年2月末発行予定）
 - ：学会賞受賞者寄稿3件，特集3件。特集は，「外来草本ヨシススキの分布域拡大状況の確認と課題」（第55回大会企画研究集会），「OECMで生きる！現行自然共生サイトの現状と新制度」（第56回大会企画研究集会）ほか。
- 3) CL第4号（編集中）：大会特集号案内（第57回大会研究発表申し込みのお知らせ），会長就任挨拶，村井宏先生（平成7年度功績賞受賞）追悼文，研究ノート，緑地探報，新会員の自慢，議事録関係，賛助会員一覧ほか。

7-2 会員の異動（総務部会）

総務部会 内田理事より，令和7年8月1日～9月30日の会員の異動が報告され，承認された。

7-3 経理および収支状況（経理部会）

築瀬会長（経理部会 今井理事 代理報告）より，令和7年8月1日～10月31日までの収支報告について説明され，収支が問題なく運営できていることが報告され承認された。

7-4 ICLEE 大会関連（国際学術交流部会）

学術国際交流部会 森本理事より、第 19 期第 1 回臨時理事会（令和 7 年 10 月 6 日（月）～10 月 15 日（水）開催）で承認されたとおり、国際大会 ICLEE2026（於 台湾）の開催日程の 2026 年（令和 8 年）10 月 30 日（金）～11 月 1 日（日）に同意することを ICLEE に報告したことが伝えられた。

7-5 防災学術連携体の活動報告（防災学術連携体）

防災学術連携体 連携委員 小川理事から、令和 8 年 1 月 9 日（金）に開催の「防災学術連携体 10 周年記念シンポジウム」への発表募集が案内された。

7-6 日本農学会への加盟学協会調査票提出について

日本農学会 運営委員 福井理事より、日本農学会に提出の「加盟学協会調査票」（：代表者（会長）名、運営委員名、事務局連絡先、会員数等を記入）の内容が示され、了承された。

7-7 研究部門の活動報告および計画

今期活動の当初であり、各部会の部会長・担当理事が今後の計画を発表した。

- ・緑・健康研究部会（岡田理事）：今後、セミナーや見学会を計画中。
- ・生物多様性緑化研究部会（森本理事）：年 3 回程度の勉強会開催、大会での研究集会開催を予定。
- ・積雪寒冷地緑化研究部会（宗岡理事）：毎年、（一社）北海道造園緑化建設業協会との講演会共催を続けており、今後も実施予定。開催の際はメール審議を行う。
- ・生態・環境緑化研究会（小野理事）：能登での活動計画を中止（今後未定）。今回・前回の 2 大会で研究集会を開催した。
- ・斜面緑化研究部会（橘理事）：勉強会、現地研修会を開催予定。
- ・乾燥地緑化研究部会（橘理事）：学会誌第 51 巻 3 号に特集記事を掲載予定。
- ・海岸林・沿岸地域緑化研究部会（岡理事）：オンライン勉強会の継続予定。

8. その他

1) 議事録作成について

築瀬会長、総務部会 大貫理事より、議事録作成の省力化をはかるため、今回理事会に会議録音音声の AI 文字書き起こしツールを試用することが提案された。使い勝手が良ければ、今後導入を検討したいとの話があった。

(以上)

会員の異動
(令和7年10月1日～令和8年1月31日)

《入会》		正会員	6名
氏名	勤務先		
深沢 麻未	(株)葉守		
小田 あゆみ	信州大学		
松尾 奈緒子	三重大学		
三鍋 佑季	北見工業大学		
中川 考介	鹿島建設株式会社		
宮田 文徳	西日本高速道路エンジニアリング関西(株)		

《入会》		学生会員	6名
氏名	所属先		
紀 正	明治大学		
佐藤 大晴	岩手県立大学		
猪島 悠太	筑波大学		
* 清水 勝大	鳥取大学		
久保 登士子	京都大学		
* 富田 明花	千葉大学		

* 印は、特例制度会員

《退会》		正会員	1名
氏名	勤務先		
黒岩 洋一	清水建設株式会社		

<1月31日現在>	
正会員	475名
学生会員	75名
賛助会員	54団体

賛助会員

2026年2月28日現在

団体名	〒	所在地 URL	TEL FAX
会津法面 (株)	967-0004	福島県南会津郡南会津町田島字南下原 66 番地 1	0241-64-5392 0241-64-5393
(有) アルファグリーン	231-0023	神奈川県横浜市中区山下町 99-1-207 http://www.a-green.org	045-650-5360 045-650-5365
(株) 大林組技術研究所	204-8558	東京都清瀬市下清戸 4-640 http://www.obayashi.co.jp/	042-495-1111 042-495-0901
(一社) 街路樹診断協会	108-0074	東京都港区高輪 3-4-1 高輪偕成ビル 8 階 http://www.gaishin.com	03-6447-7288 03-6450-2274
(株) KANSO テクノス	541-0052	大阪府大阪市中央区安土町 1-3-5 http://www.kanso.co.jp/	06-6263-7320 06-6263-7321
共和コンクリート工業 (株)	061-1405	北海道恵庭市戸磯 385-36 http://www.kyowa-concrete.co.jp/	0123-34-3366 0123-34-3369
グリーンキャスター事業協同組合	930-0094	富山県富山市安住町 3-14 富山県建設センター1F	076-442-5300 076-442-5322
栗田工業 (株)	164-0001	東京都中野区中野 4-10-1 中野セントラルパークイースト http://www.kurita.co.jp/	03-6743-5000
(株) ケイエフ	590-0021	大阪府堺市堺区北三国ヶ丘町 8-7-7 http://www.norimen.com/	072-232-6060 072-232-6008
小岩金網 (株)	111-0035	東京都台東区西浅草 3-20-14 http://www.koiwa.co.jp/	03-5828-8828 03-5828-7693
(株) 構研エンジニアリング	060-0034	札幌市中央区北 4 条東 4 丁目 1 番地 1 創成クロス https://www.koken-e.co.jp/company/	011-522-5010 011-522-5915
(株) 高速道路総合技術研究所	520-3121	滋賀県湖南市西寺 1-1-1 緑化技術センター http://www.ri-nexco.co.jp	0748-77-2124 0748-77-4019
国土防災技術 (株)	105-0001	東京都港区虎ノ門 3-18-5 青葉ビル 4F http://www.jce.co.jp/	03-3432-3567 03-3432-3576
サンスイ・ナビコ (株)	103-0025	東京都中央区日本橋茅場町 2-7-1 アソルティ日本橋茅場町 2F http://www.snse.co.jp/	03-5623-3600 03-5623-5554
(株) 住環境研究所	101-0047	東京都千代田区内神田 1-14-10 PM0 内神田 9 階 https://www.jkk-info.jp/	03-6275-0450 03-6275-0453
上毛緑産工業 (株)	370-3607	群馬県北群馬郡吉岡町大字小倉 827-87 http://www.jouryoku.com/	0279-54-7723 0279-54-8603
(株) 新日本緑化	464-0850	愛知県名古屋千種区今池 2-1-18 http://www.sn-ryokka.co.jp/	052-732-2081 052-741-4175

賛助会員

団体名	〒	所在地 URL	TEL FAX
(株) スペース・グリーン	580-0043	大阪府松原市阿保 5 丁目 7 番 25 号 https://spacegreen.co.jp/	072-331-1103 072-331-1180
(一社) 全国特定法面保護協会	105-0004	東京都港区新橋 5-7-12 丸石新橋ビル 3F http://www.norimen.or.jp/	03-3437-2588 03-3437-2566
DAIKEN (株)	101-8950	東京都千代田区外神田 3-12-8 住友不動産秋葉原ビル	03-6271-7799 03-5296-4057
(株) 高特	377-0003	群馬県渋川市八木原 224-14 http://www.takatok.co.jp/	0279-22-2035 0279-23-3913
多機能フィルター (株)	744-0061	山口県下松市葉山 2-904-16 http://takino.co.jp	0833-46-4466 0833-46-4678
田中建設 (株)	034-0012	青森県十和田市東一番町 2-50 http://www.tanaka-net.co.jp	0176-23-3521 0176-25-7011
(株) タニガキ建工	640-0405	和歌山県紀の川市貴志川町岸宮 433 http://k-tanigaki.co.jp	0736-64-8989 0736-64-8889
東京パワーテクノロジー (株)	135-0061	東京都江東区豊洲 5-5-13 豊洲アーバンポイント http://www.tokyo-pt.co.jp/	03-6372-7125 03-6372-4162
東興ジオテック (株)	104-0061	東京都中央区銀座 7-12-7 高松建設ビル http://www.toko-geo.co.jp/	03-3456-8751 03-3456-8752
(株) 東平商会	411-0943	静岡県駿東郡長泉町下土狩 72-1 http://www.tohey.co.jp/	0559-86-8898 0559-87-0047
東邦レオ (株)	170-0004	東京都豊島区北大塚 1-15-5 http://www.toho-leo.co.jp	03-5907-5500 03-5907-5510
中日本ハイウェイ・エンジニアリング東京 (株)	160-0023	東京都新宿区西新宿 1-23-7 新宿ファーストウェスト 9F https://www.c-nexco-het.jp/	03-5339-1711 03-5339-1719
(株) 西村建設	861-4703	熊本県下益城郡砥用町大字畝野 2900	0964-48-0208 0964-48-0513
(株) ニチノ緑化	103-0001	東京都中央区日本橋小伝馬町 14-4 岡谷ビルディング 6F http://www.nichino-ryokka.co.jp	03-3808-2281 03-3808-2360
(株) 日さく	330-0854	埼玉県さいたま市大宮区桜木町四丁目 199-3 https://www.nissaku.co.jp/	048-644-3911 048-644-3958
日新産業 (株)	501-6002	岐阜県羽島郡岐南町三宅 3-224 http://www.nisshin-sangyo.com	058-247-7529 058-247-7359
日特建設 (株)	103-0004	東京都中央区東日本橋 3-10-6 Daiwa 東日本橋ビル 4~6 階 http://www.nittoc.co.jp/	03-5645-5050 03-5645-5051
日本乾溜工業 (株)	812-0054	福岡県福岡市東区馬出 1-11-11 http://www.kanryu.co.jp/	092-632-1003 092-632-1023

賛助会員

団体名	〒	所在地 URL	TEL FAX
日本基礎技術（株）	151-0072	東京都渋谷区幡ヶ谷 1-1-12 NKG 東京ビル http://www.jafec.co.jp/	03-5365-2500 03-5365-2521
日本植生（株）	708-8652	岡山県津山市高尾 573-1 http://www.nihon-shokusei.co.jp/	0868-28-0251 0868-28-4410
日本特殊緑化協会	062-0032	北海道札幌市豊平区西岡 2 条 12 丁目 2 番 15 号 http://www.jsra-web.com/	011-584-3016 011-584-3030
日本緑化工協会	125-0042	東京都葛飾区金町 5-35-5-206 http://www.ryokkakou.com/	03-5660-1664
（株）ネクスコ・エンジニアリング 東北	980-0013	宮城県仙台市青葉区花京院 2-1-65 花京院プラザ 13F http://www.e-nexco-engito.co.jp/	022-713-7291 022-721-1259
（株）ネクスコ東日本エンジニア リング	116-0014	東京都荒川区東日暮里 5-7-18 コスモパークビル 3 階 http://www.e-nexco-engi.co.jp/	03-3805-7911 03-3805-7901
法面プロテクト（株）	520-0232	滋賀県大津市真野 6-14-11 http://www.norimen-protect.com/	077-571-3521 077-571-3522
（株）フジタ技術センター	243-0125	神奈川県厚木市小野 2025-1 https://www.fujita.co.jp/	046-250-7095 046-250-7139
富士見工業（株）	422-8026	静岡県静岡市駿河区富士見台 1 丁目 21 番 22 号	054-283-2933 054-283-2969
紅大貿易（株）	101-0048	東京都千代田区神田司町 2-8-3 第 25 中央ビル http://www.benidai.co.jp/	03-3256-0551 03-3254-7126
（一社）北海道造園緑化建設業協会	060-0051	北海道札幌市中央区南一条東 1 丁目 2 番地 1 太平洋興発ビル 2 階 http://www.hokuzoukyou.or.jp/	011-221-4451 011-232-5611
前田工織（株）	105-0011	東京都港区芝公園 2-4-1 芝パークビル A 館 12F http://www.maedakosen.jp/	03-6402-3944 03-6402-4051
（株）マキノグリーン	742-0031	山口県柳井市南町 7-2-6 http://www.makino-green.com/	0820-23-4082
山形開発工業（株）	596-0805	大阪府岸和田市田治米町 75 http://www.ymgt.co.jp/	072-441-3602 072-441-3838
雪印種苗（株）	261-0002	千葉県千葉市美浜区新港 7-1 http://www.snowseed.co.jp/	043-241-7732 043-238-1383
ライト工業（株）	102-8236	東京都千代田区九段北 4-2-35 http://www.raito.co.jp/	03-3265-2551 03-3265-0879
（株）緑生研究所	182-0026	東京都調布市小島町 2-40-10 桐生ビル 2F http://www.ryokusei-ri.co.jp/	0424-99-7211 0424-87-4334
ロンタイ（株）	570-0011	大阪府守口市金田町 3-1-11 http://www.rontai.co.jp/	06-6902-9401 06-6905-9070

編集後記

今期、コミュニティレター担当のひとりとなりました、吉原です。早いもので気がつけば緑化工学会に入会して30年でした。今回、岡先生からお誘いをうけて、久しぶりの編集委員です。以前に編集委員であった際には、いろいろな編集委員長のもとでそれぞれの委員長のカラーの違いなどを楽しんでいました。思い出せば岡先生との出会いも編集委員会でしたが、その岡先生が編集委員長を長く担っているなんて！感慨深いです。

さて、コミュニティレターですが私自身が未だその位置づけをよく理解できていません。が！創刊準備号（でしたっけ？）から続く毎号を楽しく読んでいます。読みたいと思う会員が増える内容を考えていき、学

会の盛り上がりによる会員の増加や会員間のコミュニケーションが深まることにつながると思います。

ただ、そうは言っても任意団体でのボランティア活動。個人的な話ではありますが、地域の自治会などや防災・安全対策関係の団体、子どもの教育活動団体など、興味のままに活動を増やしていたところ任意団体での活動があっふあっふ。学会活動もできる範囲で取り組んでいきます。評議員会で意見を出したこともあります。最近の任意団体では持続可能性を高めるため、ボランティア運営の見直しが流行っている様に見えます。最後にさらに私事ですが、長年勤務した会社を辞め、しばらく無職でした。が、新しい所属が決まり、ついに2026年4月から本格始動します！

（吉原敬嗣, yoshihara@sky-seed.co.jp）

複写される方へ

日本緑化工学会では、複写複製、転載複製及びAI利用に係る著作権を一般社団法人学術著作権協会に委託しています。当該利用をご希望の方は、(社)学術著作権協会 (<https://www.jaacc.org/>) が提供している許諾システムを通じてご申請下さい。

日本緑化工学会 コミュニティレター Community Letter of the Japanese Society of Revegetation Technology

第5号 (No.5)

令和8年3月31日 発行 (March 2026)

編集兼発行人 岡 浩平

発行所 日本緑化工学会

〒113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

Tel. 03-3818-8281 Fax. 03-3818-8282

事務局：E-mail: office@jsrt.jp